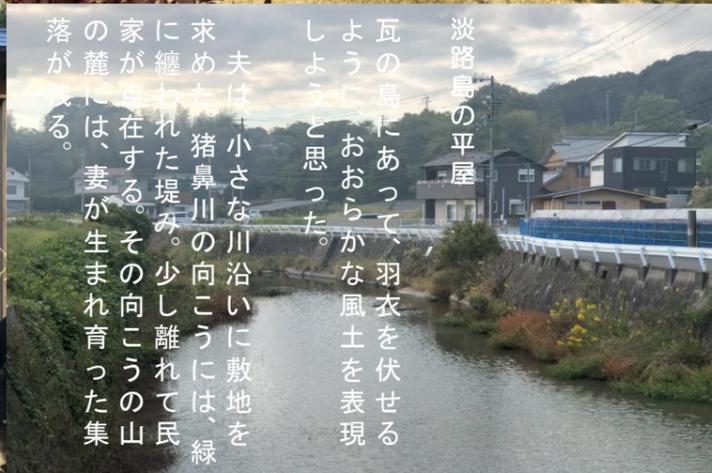
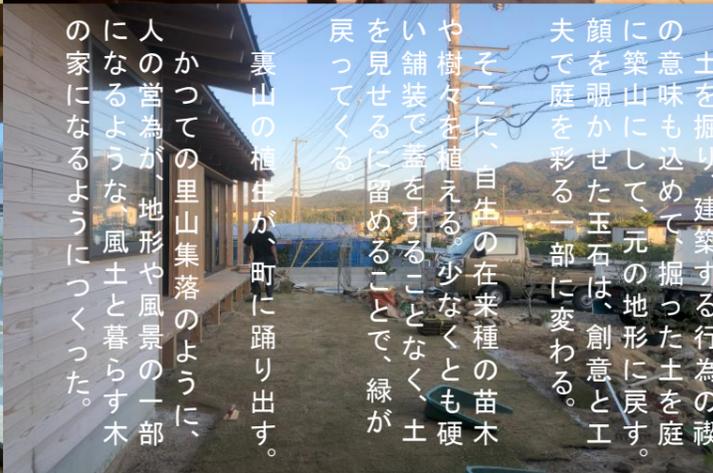




淡路島の平屋
川辺の羽衣を
伏せに。
よるに。





淡路島の平屋

瓦の島にあって、羽衣を伏せるように、おおらかな風土を表現しようと思った。

夫は、小さな川沿いに敷地を求めた。猪鼻川の向こうには、緑に纏われた堤み。少し離れて民家が点在する。その向こうの山の麓には、妻が生まれ育った集落が残る。

この島に高く険しい山など無く、営為という村々に住み暮らす人の舞台を、優しく見守る背景のように、その山並は、あり続けてきた。

そんな、故郷の連なりの中にこの家もありたいと願った。

この家を訪れる人は、斜に屋根を見上げて、その緩さと薄さに気づくだろう。建築や土木などの人為が、地形や風景を遮るために使われる世界。

そうではなくて、建築は透けるようにつくり、地域固有の素材を纏わせる。

土を掘り、建築する行為の禊の意味も込めて、掘った土を庭に築山にして、元の地形に戻す。顔を覗かせた玉石は、創意と工夫で庭を彩る一部に変わる。

そこは、自生の在来種の苗木や樹々を植える。少なくとも硬い舗装で蓋をすることなく、土を見せるに留めることで、緑が戻ってくる。

裏山の植生が、町に踊り出す。かつての里山集落のように、人の営為が、地形や風景の一部になるような、風土と暮らす木の家になるようにつくった。

